

東大・東北大現代文課外実施しました その2

内田樹は、2016年度東京大学入試の問題の評論文の中で、『知性的な人』は、『知性が活発に機能している人』であって、『正当性の自信に満ち溢れた他人の存在を認めないで知的な自分以外の他者を価値として認めない反知性主義者と一線を画す』と論じている。

しかし、『反知性主義者』は、『決して知性的でないばかりか、手持ちの自説にかかわるデータやエビデンス等の準備は万端であるがゆえに、物事の是非の判断はすでに済ませており他の判断に対して一向に関心を低くしている人』としている。

知識も豊かで自信たっぷり、反論に動じないゆえに、他人の存在は認めず、他者存在を貶めるので、これが「呪い」となり、一向に周囲を活性化しないばかりか、人々の生きる力を否定するがゆえに衰弱苦悩させる機能を発揮するというのだ。現代の日本を考えると、このような存在は多数存在している。それが善意によるか悪意によるか関係なく、「呪い」に満ち溢れる根本は、『反知性主義者』なる存在である。

内田樹は、知性を「俗人的資質能力」から解放し、新たに「集団として発動させるもの」とし、「そのものが持つ知性的なパフォーマンスが周囲に影響をもたらす、他者たちによい影響を与える力」と規定しなおすことで、『知性的』なる人物かどうかは、周囲の知的パフォーマンスが高まったか否かとするので、その「呪い」の力を解こうとしていくのだ。

特に、教員や政治家などが陥りやすい罠であろう。すべてのことは私が一番よく知っており、私が判断した内容に間違いはなく、その価値観によって優れているかそうでないかに分かれていくことを周囲に押し付け、他の人の意見を聞かず、周囲を呪いの力で封じ込めてしまうということはまああることだ。

その「呪いの力」を封じ込めていくことから、活力が生まれ、集団は活性化するのだろう。

私の「校長便り」も、その「呪いの力」にあふれていないか、いつも検証しなければならない。「呪いの力」に封じ込められると、様々な力によって集団が疲弊し、他の集団の活力に凌駕され、気づいた時にはその修復にとんでもない時間が必要となるのである。

そのことについて私たちは多くを学んできたはずだ。だからこそ、その先を見据え、新たな手立てを先手で打つ必要がある。課外をしながら考えたが、「知に働けば角が立つ、情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ、とかく人の世は住みにくい。」というところです。(夏目漱石の「草枕」の冒頭から。)